

ローラ・ネンツイ

『黒沢とき子のカオスとコスモス——徳川時代から明治時代を生きたある女性の変遷』

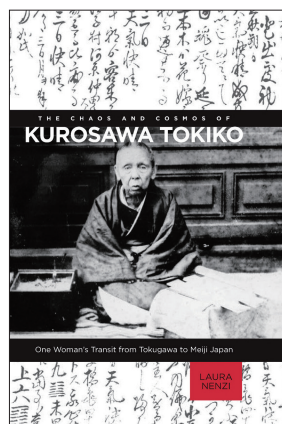
Laura Nenzi, *The Chaos and Cosmos of Kurosawa Tokiko: One Woman's Transit from Tokugawa to Meiji Japan.*

ゲイ・ローリー

伝記の勢いがとまらない。新聞や書評紙は毎週のように、ジェイン・オースティン、アン・ブロンテ、クレオパトラなど私たちがよく知っていると思っていた女性たちの新しい伝記が出たことを知らせてくれる。そのほか、これまでそれほど知られていなかった女性たち——「最後のシュルレアリスト」レオノーラ・キャリントン、十九世紀末から二十世紀にかけてハーバード大学天文台で活躍した数学者たち、ムツソリーニの「最後の愛人」クラレッタ・ペタツチなど——の伝記も出た。

私たちの分野も遅れをとっていない。奈良時代の女帝や十六世紀の女性キリシタンから全時代を通じた女流詩人や画家など驚くほど多様な日本の女性の生涯が研究者の手で発掘され、そのインパクトが探究されている。一九〇〇年以前に生まれた日本女性だ

けをとつても、パトリシア・フィスターの先駆的研究『近世の女性画家たち』(Fischer 1988)、ハルコ・ナワタ・ウオード『日本のキリスト教の世紀における女性の宗教指導者』(Ward 2009)、チエ・イリエ・モルハーン『優雅なる英雄——日本の伝説的女性たち』(Mulhen 1991)、レベッカ・L・コーブランド『失われた葉——明治日本の女性作家たち』(Copeland 2000)などのほか、個々の女性の伝記としてクリステイーナ・ラフィン『中世日本の女性再発見——阿仏尼の生涯と政治、人格、文学作品』(Laffin 2013)、ベティーナ・グラムリヒ・オカ『只野真葛論——男のように考える女』(Granlich-Oka 2006)、アン・ウォルソール『たおやめと明治維新——松尾多勢子の反伝記的生涯』(Walsh 1998)などがある。これらの本やその他の伝記を私は楽しく読み、多くのことを学



University of Hawai'i Press, 2015

んだ。しかし黒沢とき子（二八〇六一―二八九〇）の生涯を描いた本書を読み始めたとき、私は一種のおののきを感じずにいられたかった。黒沢とき子は村の教師であり巫女だった（生家が修験道場で、とき子は陰陽道に通じていた）、後に熱狂的な「勤王派」になった。幕末の勤王派は攘夷だけでは飽き足らぬかの如く（「思ひきや／異国人に／おかされて／己が身よりを／打弓矢とは」ととき子は書いている「すゝ」）。勤王派は、君主には民を救う力があると信じていたが、私にしてみれば、それこそ星占いや血液型占いを信じるのとはほとんど変わらない錯乱・錯覚である。そうした信念に駆られて、とき子は水戸に蟄居を命じられていた旧藩主徳川斉昭（二八〇〇―一八六〇）の雪冤を孝明天皇に訴えるため、一八五九年に水戸藩にある故郷の村を出て、徒歩で京都へ向かうことにした。とき子の直訴状は百五十行を越す長歌にしたためられ、全文に「かしこき君」、「御国」、帝のおわす「雲居／雲上」という言葉が散りばめられている（pp. 70-77）。当時、裸眼でも確認できる彗星が一八五八年（安政五年）の夏から年末にかけて現れ、とき子はこれを天の示された凶兆だと考えた。そしてついには京都で獄中にあつたとき子の枕辺に天満宮様（菅原道真公）が立ち、「ご託宣」を下された（pp. 103-107）。

さて、この本を楽しむためには、とき子が正気に戻ってくれればと願うのはやめて、このとんでもない異界の道案内をしてくれ

る著者に身を委ねるのがよい。この著者の語り口はとき子の物語をただそのまま伝えるのではない。著者はつねに読者に寄り添い、とき子の経験したことが何を表すのか逐一丁寧に説明してくれる。それも背景を概観するというより、とき子の物語が何を意味するかを伝えてくれるのだ。つまり「とき子の物語が幕末危機、幕府の崩壊、近代国家の登場という大きな物語と交差し、それをいかに豊かに色付けていくか」が語られる（すゝ）。時として私は著者が一歩引いて、物語そのものを語ってくれたらと思ったりする。けれどこの本は一般読者に向けた書き方をしていない。これは少なくともとき子についての本であると同じくらい、歴史科学についての著述なのである。「記憶、改竄、記憶喪失」と題された第三部は、一八七五年にとき子が帝国の大義に尽くした功績を公式に認められたことに始まり、二十世紀の歴史家によって定まったとき子の運命の評価を経て、一九六三年にNHKの第一回大河ドラマにとりあげられた船橋聖一の歴史小説『花の生涯』（一九五二―五三）に至るまで、とき子のたどった「歴史の記憶の旅」についてまるまる四章を費やしている。

歴史上、何ひとつ際立った業績があるわけでもない無名の人をとりあげ、伝記にしてしまう手腕の持ち主はこの著者をおいてあるまい。論旨は一貫して明晰で、叙述は美しくいきいきとしている。次のような一節を書けるような人がほかにいようか。

過去は歴史家やイデオログの独占領域ではない。他はいざ知らず、小説家や映画の撮影監督もその禁漁区に侵入していく。それは正確さではなく行動のため、研究ではなく壮大なショーのため、教育ではなく娯楽のためなのである。(p. 190)

こんな記述もある。「どんな歴史家も知っているように、ノスタルジアには選択的記憶喪失が必要だ」(p. 197)。こうした珠玉のような所見が文章のそここに散りばめられている。

すべての伝記は対象人物の一生が並外れたものであれ平凡なものであれ、その人生の背景事情を照らします。伝記の著述にトレンドがあるとすれば、書き手はもはやその人生を一目瞭然の単純なユニットとして想定することはできないということである。彼らはむしろ「一人の人間の人生がたとえどれほど並外れたものであろうと、それを追求することの意味はその唯一無二性ではなく、典型性であり、いかに個人の人生が文化全体に影響するより大きな問題の寓意になっているかにある」(Lepore 2001, p. 133)と感じている。著者は結論の中で、この見方をはっきりと拒否してこう述べた。「とき子の物語に意味があるとすれば、それは(はっとしないと言つてよい)その結果でもなければ、「典型性という価値」

でもない」(p. 201)。しかしながら、この物語は「大きな歴史イベントをマイクロヒストリーの視点でのぞき見ることの強みを教えてくれる」(p. 203)。ここから私たちが学ぶ多くのことは、とき子自身が学んだことである。

彼女が、巫女として村人たちの運命を占うのに使った八卦図から学んだのは、高と低、大と小、強と弱の絶えざる入れ替わりであった。二つの対立物はそれぞれ勝手にではなく、共に機能し合う。こうした宇宙観は、下層に生まれた者もその身分から上昇できるという考え方と全く矛盾しないどころか、そうした見方を少なくとも助長した。そしてその結果、とき子は身の丈より大きな人生を生きただのである。(p. 203)

参考文献

- Bernstein 1991
Gail Lee Bernstein, ed. *Recreating Japanese Women, 1600–1945*. University of California Press, 1991.
- Bosworth 2017
R. J. B. Bosworth. *Claretta: Masolino's Last Lover*. Yale University Press, 2017.
- Byrne 2013
Paola Byrne. *The Red Jane Austen: A Life in Small Things*. Harper, 2013.

- Copeland 2000
 Rebecca L. Copeland. *Lost Leaves: Women Writers of Meiji Japan*. University of Hawai'i Press, 2000.
- Ellis 2017
 Samantha Ellis. *Take Courage: Anne Brontë and the Art of Life*. Charto & Windus, 2017.
- Fisher 1988
 Patricia Fisher. *Japanese Women Artists, 1600–1900*. Harper and Row, 1988. (『近世の女性画家たち』後藤美香子訳、思文閣出版、一九九四年)
- Granlich-Oka 2006
 Betina Granlich-Oka. *Thinking Like a Man: Tadano Makuzu (1763–1825)*. Brill, 2006. (『只野真蔓論——男のようこそ考える女』岩田書院、二〇一三年)
- Laffin 2013
 Christina Laffin. *Rewriting Medieval Japanese Women: Politics, Personality, and Literary Production in the Life of Nun Abusa*. University of Hawai'i Press, 2013.
- Lepore 2001
 Jill Lepore. "Historians Who Love Too Much: Reflections on Microhistory and Biography." *The Journal of American History* 88:1 (2001), pp. 129–44.
- Moorhead 2017
 Joanna Moorhead. *The Surreal Life of Leonora Carrington*. Virago, 2017.
- Mulhern 1991
 Chieko Irie Mulhern, ed. *Heroic with Grace: Legendary Women of Japan*. M. E. Sharpe, 1991.
- Natarajan 2017
 Priyamvada Natarajan. "Calculating Women." *The New York Review of Books* 64:9 (25 May 2017).
- Roller 2010
 Duane W. Roller. *Cleopatra: A Biography*. Oxford University Press, 2010.
- Sobel 2016
 Dava Sobel. *The Glass Universe: How the Ladies of the Harvard Observatory Took the Measure of the Stars*. Viking, 2016.
- Walthall 1998
 Anne Walthall. *The Weak Body of a Useless Woman: Matsuo Taseko and the Meiji Restoration*. Chicago University Press, 1998. (『たげやめと明治維新——松尾多勢子の反伝記的生涯』菅原和子ほか訳、へりかん社、二〇〇五年)
- Ward 2009
 Haruko Nawata Ward. *Women Religious Leaders in Japan's Christian Century, 1549–1650*. Ashgate, 2009.
- (翻訳・朝倉和子翻訳家 (SWEI所属))
- * 本稿は *Japan Review* 31 (2017) に掲載された英文テキストの日本語訳である。